

ここに来て、日本のコロナ減少が「ワクチン効果ではない」と言える、驚きの根拠

11/10(水) 週刊現代 講談社 毎週月曜日発売

いつの間にか「第5波」が収まって戸惑う人は多いが、その必要はない。コロナは消えてなくなりつつある一国内外の学者たちが確信するに至る根拠がある。コロナ禍というトンネルの出口が見えてきた。

原因はワクチンじゃない

〈日本は摩訶不思議なサクセスストーリーを作り上げた〉（10月18日、米タイム誌ウェブ版）

〈新型コロナ対策で驚くべき成功を成し遂げた〉（10月13日、英ガーディアン紙）

こう海外メディアから注目を浴びるほど、日本において新型コロナの新規感染者数が9月中旬から激減している。

10月18日、全国で新たに確認された感染者は今年最少の232人。8月20日に、新規感染者が過去最多の2万5868人を記録したのが信じられないほどの下がり幅となっている。東京都では8月13日の5773人をピークに、10月25日は今年最少の17人まで減った。

7月から続いた「第5波」はもはや収束したと言って過言ではない。

一方で、なぜ国内の感染者数があつという間に激減したのか、不思議に思う人も多いだろう。厚生労働省の専門家組織はその理由を分析しているが、明確な説明はない。

菅義偉前総理は9月28日の記者会見で「ワクチン接種によって社会全体の感染予防効果が高まり、感染者数も大きく減少してきた」と、「ワクチン接種」が感染者減の要因だと強調した。それに首をかしげる専門家が多い。

「ワクチン接種が進んでいることが要因として重要だと思われませんが、それだけでは感染者数減少の急激な速度は説明できない部分があります」

こう語るのは、長崎大学熱帯医学研究所所長の森田公一氏だ。

「もしもワクチンだけが原因であれば、東京よりも接種率が高い山口や佐賀など地方のほうが感染者数の減少率が大きいはず。ところが、そうはなりませんでした。

それに、高齢者よりも接種率の低い、若い世代のほうが減少傾向は顕著です。ワクチンの効果も重要だと思いますが、他の要因も考慮する必要があります」

ワクチンだけではなく、さらに別の要因が大きく作用し、日本ではコロナが消滅するに至った。そうした説が、いまにわかに浮上している。

コロナウイルスの消滅。その根拠として、いま注目されているのが、「エラー・カタストロフ（ミスによる破局）の限界」という理論だ。

ドイツの生物物理学者でノーベル化学賞を受賞したマンフレート・アイゲンが'71年に提唱したもので、「ウイルスは変異しすぎると自滅する」というものである。

東京大学先端科学技術研究センター名誉教授の児玉龍彦氏が、新聞やテレビでこの理論を紹介するようになって話題になった。

コネチカット大学医学部教授（ウイルス学）のサンドラ・ウェラー氏はこう解説する。

「ウイルスが増殖する際に複製のミスが起きると、変異株が生まれます。このとき、高い複製能力を持つ変異株が生まれてしまうと急速に感染が拡大します。しかし、増殖が速ければ、それだけ様々な複製のミスも起こります。

その結果、ある一定の閾値を超えると今度はそのウイルスの生存に必要な遺伝子までも壊してしまい、ウイルスが自壊する。この考え方を『エラー・カタストロフの限界』と呼びます」

後編の「[ここ](#)にきて、[コロナウイルス](#)は「[日本では消滅した](#)」と言える「[これだけの理由](#)」」では、1889年から世界的に大流行したロシア風邪や、1918年から流行したスペイン風邪など、歴史的なパンデミックの事例を見ても、増減を繰り返した後、突如、収束に向かっている例を挙げつつ、それに加えてなぜ、日本で収束したのか、その理由をお伝えする。

『週刊現代』2021年11月6日号より